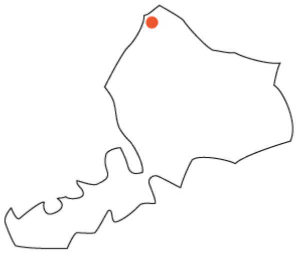
モデル事業名	三国湊緑のリレープロジェクト
活動団体名	特定非営利活動法人三国湊魅力づくりPJ （トクテイヒエイリカツドウホウジンミクニミナトミリョクヅクリプロジェクト）
ホームページ	http://www.mikuni-minato.jp/midorelay/
所属／担当者名	事務局　竹内英樹
連絡先	09083244918　takeuchi@mikuni-minato.jp
活　動　地　域	福井県坂井市三国町（フクイケンサカイシミクニチョウ）



【福井県における三国湊の位置】

活動地域の概要

- 三国湊地区（福井県坂井市三国町）は、九頭竜川の河口に位置し、石川県との県境にある。
- 人口約2万3千人、世帯数約7500、高齢化率23.1%。
- 三国町・丸岡町・坂井町・春江町の四町合併により平成18年坂井市となる。
- 大きく分けて旧市街地（北前船で栄えた湊町）、海岸沿（東尋坊を有する漁村落）、農業の盛んな丘陵地と3つのゾーンに分けられる。京福バスおよびコミュニティバスが通っているが、住民の移動は車がほとんどである。
- 農業・漁業・観光業があり、観光客の入り込み数は東尋坊で年間120万人、旧市街地で年間約9万人である。

● 活動地域の課題

- 第一次産業の担い手が少なくなってきている（平成17年度の第一次産業就業者は平成2年度比で約40%減）
- 観光業のあり方が変わってきており着地型への観光が求められているが、まだ受け入れ体制が整っていない。
- 土地所有者の高齢化、専業農家の減少により耕作放棄地が増え里山の荒廃も進み、ゴミの不法投棄につながっている。
- 三国にある森林430haのうち松枯れの規模は約80haと言われており、全てを伐倒・搬出・処理するためには約5億5千万円という莫大なコストがかかる。
- コミュニティ参加の負担から新興住宅地への人口流出が進んでいる。

枯れ松のある里山。
道路脇は倒木の危険を伴う

● **活動の内容**

前年度

1) みどリレー活動

毎月第一日曜日を活動日としてボランティア参加を募り、借り受けた里山林内の危険木の伐木、下草刈りなどを行い、荒廃した里山を人が入れる里山にする活動を行った。あわせて、第一日曜日以外に平日に活動できるメンバーで平日のみどリレー活動として里山活動を不定期で行った。

2) みどリレーワークキャンプの開催

里山体験、安全な機械の使い方の講習会・実習、里海体験、農業体験などを三国に滞在しながら体験するワークキャンプを開催した。それらの体験にプラスして、三国の街中観光や地元住民との交流活動を取り入れることで、参加者により三国を知ってもらうきっかけとなり、地元住民に喜んでもらうボランティア活動となった。

3) 新たな合意形成に向けた森の勉強会の開催

地域住民との充分な合意形成が課題であったため、月1度の勉強会を通じて地域住民同士の様々な分野における話し合いの場作りを行い、合意形成をはかった。勉強会のテーマは里山、森、文化などを企画した。

4) 九頭竜川ネットワーク「ミクマリ」の形成

県内の九頭竜川流域で活動する環境を考えるまちづくり団体との情報交換やネットワーク形成のため、それぞれの活動レポートを合体させたフリーペーパー「ミクマリ」を発刊し、九頭竜川流域で発行した。

5) 三国湊における企業研修プログラムの実施

実験的に、まずは企業1社との提携を図り、企業研修プログラムの作成・コーディネート・実践を行った。将来的にはその収益で活動費を捻出していけることを目指す。

6) シンポジウム「第2回ふくいミクマリ会議」を実施。

1年間の活動の総括として、また新たな目標や課題に向けての解決策の提言として、九頭竜川流域関連団体・行政・住民が参加できるシンポジウムを開催した。

（直近１年間の進捗など）
・今年度は、これまでのフィールドを整備すると共に、新たなフィールドにて、月に一回の里山実践活動を行っている。
・今年初めての試みとして「第一回森のクラフト展」を行った。県内外の人々が出展し、森の中に様々な手作りのものを持ち寄った。実践活動ではなかなか参加できない、子供達や大人達も森に親しんだ。
・１１月にワークキャンプを開催予定。県内外からボランティアを募集し専門家の指導のもと作業を行う。今年はロープワーク、竹炭焼き、人工林の手入れの方法などの活動を学ぶ予定をしている。
・森・川・海のつながりの意識を高めるために九頭竜川流域ネットワーク形成を目的として、他の環境活動団体と協力して「ミクマリ通信」を vol.2～vol.4 まで発行した。

● 活動の成果

・ 活動を始めた当初は、松枯れをどうにかしたいという明確な目標があったため、意識の共有ができたが、海岸線の松林から、フィールドを里山に移してからは、森の管理・利用方法などが人それぞれのため、少しずつ問題が浮かび上がり、今後取り組むべき課題と目標が明らかになった。
・ 毎月の活動やワークキャンプ・勉強会を続けることにより、様々な情報や知識を持った人が県内外から参加してくれたため、参加者全体のレベルアップにつながった。
・ 地元住民に少しずつこの活動が普及でき、県外の協力者も得ることができた。
・ 地元農家と協力し農業と森と人との関わりについて総合的に学ぶ事が出来た。

ワークキャンプにて伐木の方法を学ぶ。

・ 直近１年間の成果など
・ 「森のクラフト展」を開催する事により、普段実践活動に参加できない人々が森に親しむ事が出来た。森で楽しむ子供だけではなく、大人達の笑顔を見て、「大変だったけど森の整備をしてきてよかった。自分達は間違っていなかった。」との声が聞こえた。実践活動をするだけではなく、空間の活用を考えたり、そこにある植物の名前を調べて山菜や木の実などの恵みを頂くなど、自然と親しみ、楽しむ事の大切さを感じた。
・ 「ミクマリ通信」を偶然手にした県外の人が、みどりレー活動に興味を持ち参加してくれた。その後、数カ月三国にとどまり、里山整備や三国の町おこしの活動に参加してくれた。
・ 一回だけの参加にとどまらず、持続的に参加してくれるメンバーが数人できた事が大きな成果となっている。

森のクラフト展の様子

● 今後の課題及び展望

・課題（活動を通して発見された課題等を記入）
・ 借りた森での作業では山主をいかに巻き込んで、意思疎通を図り活動を広げていくか。
・ 活動全体の知識共有・レベルアップ・意識向上をいかに行うか。
・ 参加者・リピーターをいかに増やすか。
・ 活動資金をどうするか。
・ 森の活動の成果が見えるのが数年から数十年後なので評価が難しい。
・ 現代の里山との関係、目的意識をいかに持つか、人工林・天然林・里山のバランスを考える必要がある。

展望（今後の取組みや検討について記入）
・ 山主と話し合いを行い、森の目標を明確にした上で活動を行う。必要な知識は定期的に勉強会などを行って合意形成をはかっていく。
・ キノコの森づくりや炭や薪、塩作りを行っていくことで里山保全活動と活動資金調達活動をリンクさせていく。
・ 継続して技術や知識の習得をすることで全体の自然や森に対する知識がレベルアップし、活動内容の幅が広がる。
・ 県、企業、学生、地元を活動に巻き込んでいくためにはより魅力的なプログラムを組む必要がある。また、強引にならない（結果、単発で終わらせない）ための合意形成や周知方法を、丁寧に取り組む必要がある。
・ 「森のクラフト展」などのイベントを企画し、地域住民・都市民が森に親しむ機会を作り、活動資金調達につなげてゆく。

● その他（自由記述）